



放送開始50年(2011年)と、60年(2021年)には、アニバーサリーベストのCDが発売された。



YOASOBIが手がけた「ツバメ」の合唱バージョン。©NHK



NHK「沼にハマってきいてみた」との「ツバメ」コラボレーション。©NHK

誰もが歌うことができてみんなのうたを目指して

子どもの頃、テレビの前で大好きなあの曲が流れるのを期待して待ったり、大人になって何気なく耳にしたその曲で当時の思い出が不意によみがえったり。きっと誰もがNHK『みんなのうた』にまつわる、そういった体験を持っているはず。一回わずか五分の短い放送だが、誕生から六十二年の間に作られた作品はおよそ千五百曲以上。時代を映し、世代を超えて日本人々に親しまれ、歌い継がれてきた同番組について、担当プロデューサーの鎌野瑞穂さんに話を聞いた。



お話を聞いた鎌野瑞穂さん(NHKエンタープライズ)。

「今求められている歌」をアーティストに委嘱

一九六一年四月の記念すべき第一回目に放送されたのはオリジナル曲の『誰も知らない』(うた…楠トシエ/作詞…谷川俊太郎/作曲…中田喜直)と、チェコに伝わる古い民謡の『お牧場はみどり』(うた…東京少年少女合唱隊)。当初は

このように書き下ろし曲と、日本語歌詞を付けた海外の愛唱歌や国内の童謡唱歌などによる二本立ての構成が主であったが、一九七〇年代からはオリジナルの作品が増えていった。『北風小僧の寒太郎』(うた…堺正章、東京放送児童合唱団)や『山口さんちのツトム君』(うた…川橋啓史)など、今なお愛される国民的大ヒット曲が数多く登

場し、鮮やかなアニメーションとともに親しまれていった。

「もともと、子どもたちに良質で健全なうたを聴いてもらおうというねらいで始まった番組でしたが、次第に幅広い世代に注目されるようになりました。今は子どもだけでなく全世代にわかる楽曲を認識しています。なので最近、『みんなのうた』は大人っぽくなったよねと言われます」
一九八〇年代からはシンガーソングライターやアイドルなどの参加が増え、楽曲のバリエーションが広がって更にお茶の間に浸透していく。その流れは現在まで続いており、二〇二二年の十月〜十一月の新曲には、三十一年ぶりのオリジナルアルバムをリリースしたばかりの原由子による『千の扉』(Thousand Doors)や、本人が作詞も担当した『Myこと俳優の石田ゆり子が歌う』(ちいさなうた)などが話題を集めている。

「放送する作品は番組サイドがアーティストに委嘱して書き下ろしてもらっています。今、どんな歌が時代に合っているのか?それを誰に担ってもらうのがよいのか、日々アンテナをはっています。曲はただ完成品をいただくのではなく、まずデ

モ音源が届いた段階で社内ですべてを開いて、番組スタッフを集めて感想を聞き、歌詞や曲調の要望などをアーティスト側に伝えて、ブラッシュアップを重ねて一緒に仕上げていきます。一方で映像はどんなものがいいか、誰にお願いするかも考えて発注し、同じようなプロセスで同時進行。最終的に出来上がった作品は、番組のオンエアをもって解禁されます。いつも目指すのは、何の予備知識もなくぱっとテレビをつけた視聴者の心にとすつと入っていくような作品です。そのアーティストのファンだけでなく、子どもから年配の方まで、皆さんに楽しんでいただけるものをお届けしたいと思っています。曲によっては構想から放送されるまで一年くらいかかった作品もあります」

ヒット曲『ツバメ』の広がり

これまでも世相を反映し、時代とシンクロした楽曲の数々を送り出してきた『みんなのうた』。最近のヒットと言えば子ども向けSDGs番組シリーズ『ひろがれ!いろとりどり』のテーマソングを制作するプロ



会場の熱気もポップコンの見せ場のひとつだった。
(第19回大会 1980年)



期待を胸に会場に向かう大勢のファンたち。
(第13回大会 1977年)



(上)合歡の郷で開催された第5回大会(1973年)。
(下)第7回大会(1974年)以降、つま恋に会場を移した。

ポップコンが今日のアーティストの音楽への向き合い方をつくった

1970年代から80年代に青春を過ごした人にはおなじみのポピュラーソングコンテスト(ポップコン)。音楽史を飾る多くのアーティスト、そして記憶に残る「日本のうた」を生み出したこの歴史的音楽イベントの意味を振り返ってみよう。

一九六九年にスタートしたポップコン

ビートルズの登場など、世界的に若い世代による新たな音楽のムーブメントが台頭した一九六〇年代は、日本でも学生などによる自由な音楽活動が盛り上がりを見せていた。こうしたアマチュアによる音楽シーンのバックアップを目指して、ヤマハは一九六七年に全日本ライトミュージックコンテストをスタートさせた(一九七一年の第五回まで開催)。このライトミュージックコンテストからは、ジャックス、赤い鳥、オフコース、チューリップなど、その後の日本の音楽シーンで重要な役割を果たすアーティストが巣立っている。さらにヤマハは「生活の中の身近な喜びや悲しみを歌にして、人々とその心を分かち合おう」という「歌ごころ運動」を提唱し、その一環としてアマチュアを対象にしたオリジナル曲コンテスト「作曲コンクール」が一九六九年に三重県の合歡の郷でスタートした。

ポップコンから生まれた日本のうた

当初は、(アマチュアが作曲した曲をプロの歌手が歌い、純粋に曲のよさを評価する)という趣旨でスタートし、応募曲もヤマハ音楽教室を中心に募られた。しかし、門戸を広げるために第二回以降は一般公募となり応募曲も急増。シンガーソングライター時代の迎えて作曲家自身も歌うケースも増えるなど、大会が大規模になってゆくとともにその趣旨も変化していった。そのため作曲コンクールはライトミュージックコンテストと一本化され、一九七二年の第四回から大会名もポピュラーソングコンテストとなる。七三年から本選会が年二回開催となった。会場も七四年の第七回大会からは新設されたばかりの静岡県ヤマハリゾートつま恋で行われるようになり、全国から大勢の聴衆が集まる一大イベントとして、ポップコンの愛称とともに定着していった。

名曲を奏でた楽器たち

～日本の音楽シーンを支えてきたヤマハの楽器を振り返る～



世界唯一の楽器の総合メーカーであるヤマハは、アーティストとの積極的なコラボレーションを通して楽器の開発を進めてきた。そうしたアーティストとの密接な関係から生まれた楽器が、多くの日本のうたを彩っている。



1979年に発表された「SG800」の高中正義モデル。



人気のヤマハエレキギター-SGシリーズ。2010年に発表された「SG1820」。



アコースティックギターの最高機種Lシリーズとして2014年に発表された「L36 ARE」。



伝統のアコースティックギター-FGシリーズで2019年に発表された「FGX5」。

一九六六年に誕生したLM楽器

ビートルズなどの海外の音楽ムーブメントの影響を受けて、日本でもGS（グループ・サウンズ）やキャンパス・フォークなど新しいポップスが萌芽しつつあった一九六六年、ヤマハはポピュラー音楽用楽器（LM楽器）の開発を本格的にスタートさせた。

エレキギター、エレキベースの分野では一九六六年に「SG-2」「SG-3」「SG-7」（以上ギター）、「SB-2」（ベース）などの人気モデルを次々と発表するとともに、アドバイザーとして当時のエレキバンドの最高峰だった寺内タケシとブルージーンズの寺内タケシ、そのメンバーで後にワイルドワンズを結成する加瀬邦彦らの協力を得て開発を進めていく。さらにブルージーンズ・カスタムなどシグネチャーモデルも作られ、ステージやレコーディングでも、多くのGSの名曲がヤマハのギター、ベースによって奏でられた。ヤマハが最初のドラム「D20」「D30」を発表したのは、ギターから一年遅れた一九六七年のこと。当

初から名ドラマーの猪俣猛、ジョージ大塚が、契約アーティストとしてヤマハドラムの発展に大いに貢献した。現在でも神保彰をはじめ、多くのドラマーが製品開発をサポートしている。

また、ヤマハがエレキギターを発表した一九六六年には、ヤマハ初の国産フォークギターである「FG180」も発表されている。さらに一九七〇年代にかけてのフォーク・ブームの高まりとともに、「FG1500」「FG2000」「FG2500」などの高級機種も登場し、南こうせつ、さだまさしなど、多くのフォークシンガーに愛用された。

実際、南こうせつは最初のアーティスト写真でもヤマハのFGシリーズを持つていたし、日本人ソロアーティストとしての初の武道館コンサート（一九七六年）では、初めて作ったヤマハのオーダーメイド・フォーク・カスタムモデルで演奏している。

有名ブランドが多いフォークギターだが、一九七四年には最高級モデルとしてLシリーズも登場し、大会場などでPAを通したときの

サウンドクオリティの高さに定評があるヤマハのギターは、今も多くのアーティストのステージを支える。

ポップスを支えたギターとキーボード

一九七〇年代後半になると、洗練されたサウンドのシティポップスやフュージョン・サウンドが人気を集めていくが、そうした新しいシーンのなかでもヤマハの楽器は活躍していく。

例えばギタリストの高中正義は楽曲によってさまざまな音色のギターを使用しているが、『BLUE LAGOON』（一九八〇年）などの名曲は、響きに深みのあるヤマハSGシリーズでしか出せない音で演奏されている。その意味で高中正義は、カルロス・サンタナとともにSGシリーズの魅力を世界に知らしめたギタリストと言えるだろう。

キーボードの世界でも大きな動きが生まれた。一九七六年、グラランドピアノの構造にピックアップをつけたステージピアノ「CPC-70」（七十三鍵）が登場し、ピアノを持ち運ぶことが不可能だった会場でも

ピアノ演奏ができるようになり、ライブシーンは大きく変わった。

一九七八年には八十八鍵の「CPC-80」も登場。オフコース時代の小田和正も『さよなら』（一九七九年）など多くの曲で「CPC-80」を弾いているほか、ステージでもメインのキーボードとして弾いていた。

また八神純子がステージで弾いていたカスタムモデルの白い「CPC-80」も話題となり、販売を求める声も少なくなかった。

画期的なヤマハのシンセサイザー

一九八〇年頃になると、YMO（イエロー・マジック・オーケストラ）をはじめとするテクノ系アーティストはもちろんのこと、ポップス系でもシンセサイザーを使ってサウンドづくりをするアーティストが多くなっていく。そんな時代に登場した画期的な楽器が、世界初のフルデジタルシンセサイザー、ヤマハ「DX7」だ。アナログシンセサイザーでは不可能だった多彩な音色を持つとともに、音色データの保存・瞬時の切り替えが可能な「DX7」



「失われた未来イメージ」の輝き

——シティポップをめぐる考察

柴崎祐二

近年、メディアでもよく見かける「シティポップ」という言葉。ブームの裏側を、気鋭の著者が読み解いていく。

どのようなジャンルなのか

昨今、国内外で大きな人気を博しているシティポップ。一九八〇年代に青春を過ごしたリアルタイム世代にとどまらず、当時を知らない後進世代を巻き込みながらさまざまなアーティスト／楽曲が熱く支持されている。竹内まりや『プラスティック・ラブ』（一九八四年）をはじめ、松原みき『真夜中のドア（stay with me）』（一九七九年）、泰葉『フライデー・チャイナタウン』（一九八一年）などの往年の名曲が次々とリバイバルヒットしてきた。かつて世に出されたさまざまなレコードがプレミア価格で取引され、さかんに再発売されるといった状況も常態化してきた。こうしたブーム

が各メディアで報じられるようになって久しいが、それに伴って、「シティポップとはそもそもどんな音楽なのか?」、「なぜシティポップが再び注目を浴びているのか?」という疑問も膨らんできたように思う。

シティポップとは、一九七〇年代の米国のウェストコーストロック、AOR（アダルトオリエンテッドロック）、フュージョン、ソウルミュージック、ディスコミュージック等からの影響を日本語オリジナルの表現へ昇華した、都会的なポップスであると感じては定義できる。音楽的な特徴としては、メジャー7thコードやテンションコードを多用する洗練されたハーモニー、16ビートを織り交ぜたソウル／ファンク由来のリズム、伸びやかでクリア

な歌声、などを挙げるができる。一般的なコンボ・スタイルに加え、ホーンセクションやパーカッション、シンセサイザー等の豪華なサウンドを伴うことも多い。演奏に高度なテクニックが求められることから、最新の演奏技術に精通したスタジオミュージシャンが重宝された。また、林哲司、井上鑑、武部聡志をはじめとした多くの作曲家／編曲家たちも、シティポップのサウンドに特有の洗練さをもたらした。

音楽面以外で重要な特徴を挙げるとすれば、その当時の日本の若者たちの社会意識を色濃く反映したものだっただけという点になるだろう。一九六〇年代末に隆盛した左派学生運動を由来とする政治的な機運が霧消していく中、主にアメリカの都市文化を模とする都会的なライフスタイルに憧れ、個人の消費生活に邁進していく「バブル経済前夜」のきらびやかで楽天的な空気が、シティポップには濃密に漂っているのだ。

世界的人気の理由

シティポップの起源をたどると、山下達郎や大貫妙子が在籍したシユ

ガー・ベイブや、はっぴいえんどを解散した細野晴臣と鈴木茂らによって始動されたセッションチームIIティン・パン・アレー周辺の音楽をその始祖と位置づける説が有力だ。しかし、一九七〇年代当時、これらは「シティポップ」と呼ばれていたわけではない。当時の資料をひもとくと、より広範なジャンル名であるニューミュージックの一派と目されることが多く、あるいは、「シティミュージック」という名称でカテゴライズする例もわずかながら確認できる。いずれにせよシティポップという言葉で呼ばれていたわけではないことには留意されたい。

なぜこれらのアーティストがシティポップと呼ばれるようになったかといえば、二〇〇〇年前後から「シティポップ」をタイトルに謳うディスクガイド本等でこれらのアーティストの作品が始原的な存在と位置づけられ、結果的に、本来は後に発生した用語であるはずのシティポップの呼び名が遡及的に適用されたことによる。「シティポップ（ス）」という呼称がメディア上で明確に現れてくるのは一九八〇年代初頭のことである。稲垣潤一、